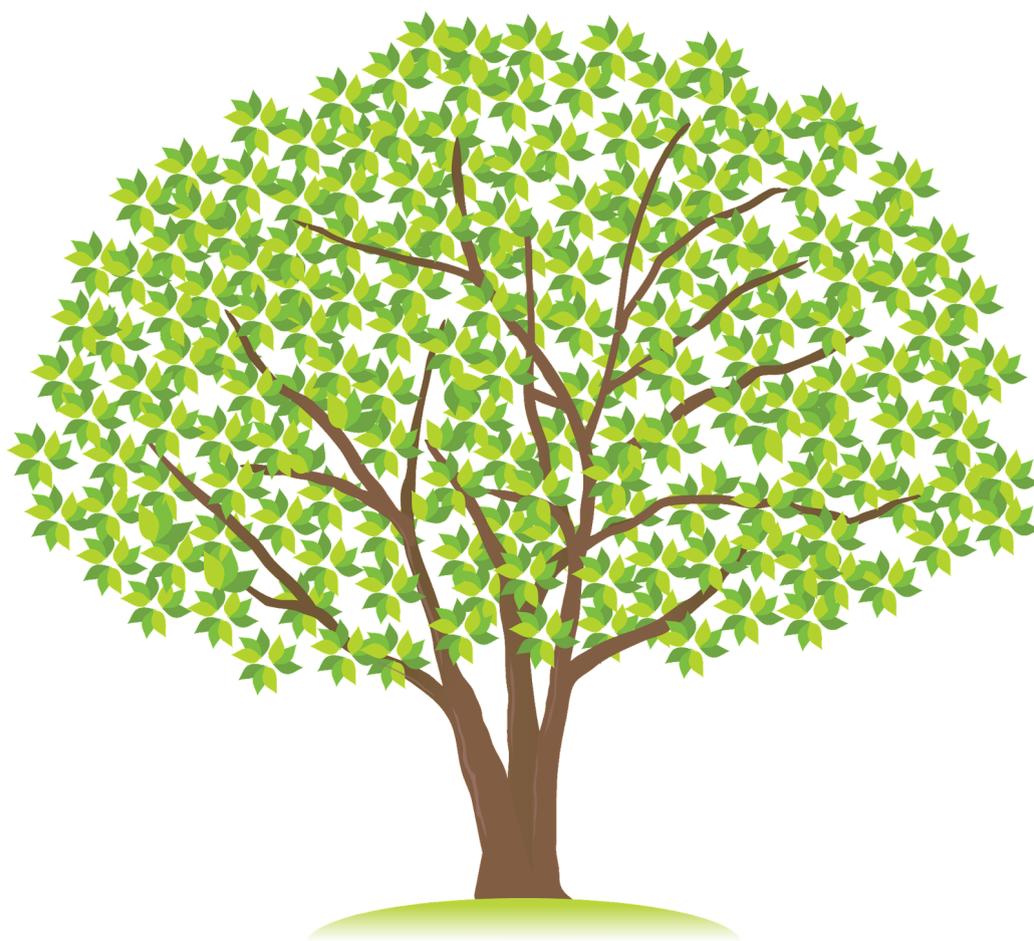


# あかり10年の挑戦

2016年8月2日から8月6日の5日間  
朝日新聞 埼玉版掲載記事



特定非営利活動法人あかり  
埼玉県久喜市吉羽1-32-24  
TEL 0480-24-2060

# 「できる」が広げる選択肢

## 障害者自立支援法10年

### NPOあかりの挑戦

1

気持ちが混乱したらしい。自閉症による行動障害の一つ。弁当がすべて床に散らばるまでパニックは続いた。

コンビニエンスストアにやってきた小学生の男児が、商品棚の弁当を手ではらい落とし始めた。お弁当の弁当は種類が多すぎて並び切れず、買いたい

そんなときは「コンビニを避ける」のが常識的な事後対応とされていたが、指導員たちの考えは違った。「一生、コンビニのない生

活で良いはずがない」。そこで、すべての弁当の写真を撮って並べ、画像を見ながら好みの品を絞り込む練習を繰り返した。選んだ弁当の写真を見て店に行く、今度はうまく欲しい弁当にたどり着けた。

幸手市の杉山豊和さん

(18)が小学校高学年の頃、障害福祉サービスを行うNPO法人「あかり」(久喜市)が運営する障害児支援の事業所で得た体験だ。今では小学生らの介添え役としてコンビニへ出向く。「コンビニ弁当」が彼の



言葉を出そうとする杉山豊和さん(右)。「あかり」の古堺義通さんが手を握って励ました=久喜市青葉5丁目

## 肯定すること 人生好転のカギ

生を選択肢を広げた。父の清史さん(52)は、言葉がなかなか出ず、理解力が乏しいと感じた4歳の豊和さんを通して医療機関を訪ね、自閉症だと知った。「話し始めるのが少し遅いだけかなと考えていました。診断を受けてからは何につけ、息子には無理だろう、どうせダメだろうと悪い面ばかりを見るようになっていたのです」

後ろ向きな思考が逆回転し始めたのは、通い始めた事業所である日、「豊和君は器用です」と聞いてからだ。紙をハサミでうまく切るし、鉛筆も上手に握るという。なにより、心を許す相手には言葉も少し発するようになっていた。「まさか器用だなんて、家ではまったく見せない姿でした」。理由は簡単だった。指導員たちは豊和さんの「できること」だけを見ていた。人は否定されずに

認められたと感じたとき、動き出すきっかけをつかむ。障害がある人たちの世界に限らず、広く人生を好転させるカギだろう。みんな本来「できる人」だ。豊和さんは来春、特別支援学校を卒業。自立のための作業所で紙の箱を折る研修を受け、社会人として歩み出そうとしている。そんな息子の姿を見て、清史さんは自分に言い聞かせるように話した。「少しずつ、期待が膨らんでいきます」

営利、非営利を問わず、広く法人が障害者支援サービスを提供できるようになった障害者自立支援法(現在の障害者総合支援法)の施行から今年で10年。06年に最初の事業所を設立し、いま県東北部を中心に18事業所に広げ「県内最大手」となった「あかり」の歩み。そこには、だれもが心豊かに生きようと願う「挑戦」があった。

(この連載は高橋町彰が担当します)

# 子らの笑顔 全ての原点

## 障害者自立支援法 10年

### NPOあかりの挑戦

2

蓮田市の島村あいらりさん



④「あかり」代表理事の川岸さん(右)と統括責任者の古堺さん⑤この笑顔が原点。あかり主催のサッカー教室から



(9)は脳性マヒで体が動かせず、言葉も出ない。NPO法人「あかり」が運営する児童発達支援センター「いずみ園」(伊奈町)で、看護師に見まもられ過ぎず、少しやんちゃな男の子たちが周りで動き回り、一見ハラハラするが、

あいらりさんはこの場が好きだ。

友人たちの声に応え、笑っているように目が動く。集団の中で生活して、表情が豊かになった。あかり代表理事の川岸恵子さん(60)は、この「笑顔」が支援で最も大切だと言う。「笑顔は人生を生き切ることにつながっていくから」

あかりの発足は、NPOが支援サービスに参入できるようになった10年前の障害者自立支援法施行にさかのぼる。子どもが好き

## 「生き切った」長男の人生 胸に

で、会社経営を退いた後に障害者支援の世界に飛び込んだ古堺義通さん(72)が2006年、川岸さんとNPOを立ち上げた。支援方針をめぐる論争もあったが、近隣住民の理解を得ながら歩みは順調で、今では5市町で18事業所を運営。約300人の職員が600人の障害者・障害児と関わる。

2人の出会いは13年前。川岸さんが当時運営していた久喜市内の学童クラブを古堺さんが訪ねた。子どもたちと無邪気に遊ぶ姿に、川岸さんの第一印象は「この年齢の男性にしては、変わった人」。当の古堺さんは「言葉で表現できない障害者の心には深いものがぎゅっしり詰まっている。この子たちと一緒にいたい」と感じていた。

千晃さんは身体・知的障害を乗り越えて就職を果たしたが、01年にくも膜下出血のため23歳で命を閉じた。「障害がある子がいたことで、不幸だと思ったことはない。たくさんの経験と出会いをくれた千晃は、十分に生き切ったと思う」

あいらりさんは、あかりに通う子の中で最も障害が重い。母の洋子さんは「支えてくれる人たちがしっかり結びつけてくれた。生まれた時は命さえ危ないと言われ、暗闇を歩いてきた私はいま、教力月先が見えるようになった。やがて数年先も」。希望をつないで、命が輝く。

川岸さんには脳に障害を持って生まれてきた長男

# 「らしさ」生かす場所 探す

## 障害者自立支援法 10年

### NPOあかりの挑戦

3

を出すときは「4」、  
「3」は「9」と打つた。国道ルートも地図上でほとんど記憶している。誰かに教えられたわけではない。雄太さんはできる理由を語らないが、確かに並外れた能力だ。

の研修会を開いた。同じことを繰り返すなど自らの障害や心の内側を深く描いたエッセー集「自閉症の僕が跳びはねる理由」が世界各国で翻訳され、ベストセラーになっていった。

久喜市内の事務所に着いた22歳の東田さんは、部屋の中の棚という棚をすべて開け放って中を確認するまで落ち着かなかった。研修会の後、いつもの時間に食が食べられずパニックを起した。そんな行動も含め「東田さんらしさ」に触れ、寄り添うのが研修の目的だ。話すのが苦手でも、

NPO法人「あかり」が運営する障害者の就労支援施設「あかりワークス国納」（宮代町）。ここに通う幸手市の井上雄太さん（20）は、訪れた人に誕生日を聞く。自閉症の彼が、人とコミュニケーションを取るための手段の一つだ。

月日を答えると、「何年？」と生まれた年を尋ねられる。さらに答えると、「火曜日だ」。生まれた日の曜日を教えられ、訪問者たちは驚く。父の俊幸さん（54）、母の繁子さん（51）によると、雄太さんは幼い頃から数字と地図に強い関心を寄せたという。

小学校低学年の頃、電卓で遊んでいて、数字の「2」



箱折りの仕事に励む井上雄太さん（左） 〓宮代町

## 尊厳認めることが出発点

東田さんは文字ボードで思いを表現できる。「あかりは僕を受け入れてくれた」と感謝の言葉を残した。

筆談にして、自分の思いを伝えることができる障害者は、実は多くない。あかり統括責任者の古堺義通さん（72）は、言葉なくただ見つめてくる視線を日ごる感じ、「その心の奥に東田さんのように深いものがあるのではないか。自然と敬意が生まれてくる。支援は人として尊厳を認めることから始まる」と話す。

あかりワークス国納で、雄太さんは紙の箱を折る仕事に集中力を発揮し、出来高払いの「月給」は以前の2倍になった。息子の成長を尋ねる両親に、古堺さんは伝えた。「雄太さんにとって、これがふさわしい仕事なのか、実はまだ分からない」。 「らしさ」を生かす場所探し、今日も続けられている。

# 「ダメ」を封印 奇跡生む

障害者自立支援法 10年

## NPOあかり の挑戦

4

春日部市の尾形亮さん(13)はリハビリに通う病院で「出世頭」と呼ばれている。生まれて10カ月で突発性の脳症を発症し、医師から「歩くことも話すことも将来できないだろう」と言われたという。だが、今は歩くことができ、言葉も出て地域の中学校に通う。7歳上の姉に連れられ、カラオケにも出かけて行く。

母の久美江さん(48)は亮さんが幼稚園に通う年齢に

近づいたとき、受け入れ先を探した。30歳以上にかけ合ったが、すべてダメだった。立てないのに加え、じっとしてられない障害もみられた。上司のついで、障害福祉サービスを行うNPO法人「あかり」の児童発達支援事業所「こ



マンツーマンで行われるあかりの児童発達支援。羽生市南1丁目の「きらめき園」

## 現場の空気も優しく、明るく

り園」(久喜市)が見つかった。

亮さんのあかりでの歩みは多くの「小さな奇跡」に彩られている。たとえば、子どもに乗せたシーツの端を持ち上げ揺らす「ブランコ」をしていた時だ。

「自分も」とにじり寄ってきた亮さんを指導員は見逃さなかった。「すごい。乗ろうとしている」の一言が、スイッチを入れた。立ち上がり、1歩、2歩と歩けるようになれば、新たな目標が次々と生まれてくる。意思を示す言葉、運動会で30分の「完走」……。

につながる「ダメ」は事業所で使ってはいけない言葉だ。

障害者支援に限らず、社会生活の中でダメと言わないのは難しい。実践できず、音を上げ辞めていった指導員もいる。だが、職員間でもダメと言わず、丁寧に理由を説明することで、療育の現場を含め職場全体に優しさと明るさが生まれてくるのだという。

あかりの常勤職員70人余りが月1回開くミーティングは、そうした成功例の報告の場でもある。一方、支援がうまく進まず抜き差しならない状況に陥って「心が折れてしまった」という事例も紹介されていく。

あかりは昨年6月、障害者支援の指針を列挙した小冊子「あかりの想い」を職員向けに刊行した。37年100年後のあなたへ」を指針の一つに「『ダメ』と言わない」がある。拒否

その報告をした入社1年目の若い女性職員が、発言の最後に言った。「でも、本当につらいのは私ではなく、障害を抱えて苦しむ利用者の方です」。この思いが伝わっていけば、きっと「奇跡」は続く。

# 切れ目ない支え 実現



衛生管理された作業所で、菓子を袋に詰める  
平沢航史さん（右から2人目）＝宮代町国納

## 障害者自立支援法 10年

### NPOあかり の挑戦

5

障害者や障害児の支援サービスにNPOが参入できるようになって10年。県内の障害者支援施設は増え続けている。自前の施設を構える社会福祉法人でなくても、法人格があることで賃貸物件を利用でき、支援員

## 自立訓練・学びの場、創設へ

の配置基準を満たせば事業が始められる。個別の事情を抱えた地域の求めに柔軟に応じやすい。

県によると、発達支援や放課後デイサービスといった障害児通所支援に限っても、今年3月時点で465事業所。4年前は103事業所だったから、年に100力所近くが新たに立ち上がった計算になる。

発達障害の症状を示す15歳未満の子どもは6万人余り。幼い頃から支援が特に重要とされ、県障害者支援課は「潜在的なニーズに、事業所側がさまざまな選択肢を示し、応えてくれている」と歓迎する。

NPO法人「あかり」はこの10年で、久喜を最初に加須、羽生の3市と宮代、伊奈の2町で18事業所まで増やしてきた。幼児の利

用者に対してはマンツーマン、小中高生は2人に1人の支援員を配置する。18歳以上の利用者には就労支援施設を運営し、「切れ目のない支援」を実現した。

春日部市の平沢航史さん(21)は、県の最低賃金(時給820円)を保証する就労支援事業所「あかりワークス国納」(宮代町)で菓子を袋詰めする仕事に励む。強い自閉症で3歳から療育を受けてきた。

14年5月に開所した事業所の第1期生。採用面接をパスし社会人になったことで自覚が生まれ、自宅から電車通勤も始めた。「わが道を行く」行動が目立った彼が7人の仲間をサポート、リーダー的な存在だ。母の明子さん(56)は「子離れが課題」と話し、息子の独立を意識し始めた。

あかりの試算では、障害者が仕事に就いた場合、生

活支援を受け続けるのに比べ公費負担は半分で済む。就労支援の担い手を広げることは、仕事を通じて成長につなげるだけでなく、財政面のメリットも大きい。

あかりは来春、春日部市内に特別支援学校を卒業した18歳以上を対象の「あかり学園」を開校する。自立訓練を目的とした福祉サービスの一環だが、あかり代表理事の川岸恵子さん(60)は「障害者にとって専門学校のよう学びの場にもしたい」と話す。

障害があっても青春を楽しみ、経験を積み、仕事を見つめる。「30歳になったら親元を離れる」。目標に向け、あかりの挑戦は続いていく。

＝おわり  
(この連載は高橋町彰が担当しました)

